

# Intrauterine fetal and neonatal death between small for date and non-small for date in small for gestational age infants

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 伊藤 敏谷   |
| 発行年 | 2021-03-16  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10271/00003817">http://hdl.handle.net/10271/00003817</a> |

## 論文審査の結果の要旨

出生時体重が在胎週数に対応する標準の 10 パーセントイル未満である児は、small for gestational age (在胎不当過小) 児と定義される。さらに、出生体重・身長ともに小さい small for date (SFD) 児と、体重のみが小さい非 SFD 児に分類される。この研究は、SFD 児群と非 SFD 児群における子宮内胎児死亡と新生児死亡の発生率のパターンの違いを明らかにすることを目的とした。

浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認 (17-111) を得て、日本産婦人科学会の周産期データベース 2013 年版を用い、形態異常や胎児水腫などを除外した単胎経膈分娩 93,034 例を対象として研究を行った。申請者らは、胎盤重量 (PW) と、出生体重/胎盤重量比 (F/P 比) の標準曲線に基づき Z score を計算し、散布図を作成し、各々の 10、90 パーセントイルに相当する値で三分割して、散布図を 9 区分に分類する方法を提唱し既に報告した。今回は、それを発展させて、このうちの在胎不当過小児 7,780 例を対象とし、SFD 児群と非 SFD 児群について、各区分別に子宮内胎児死亡と新生児死亡の発生率を分析した。

その結果、SFD 児群と非 SFD 児群を比較すると、全体での新生児死亡は SFD 児群で高く (0.4% vs 0.1%、 $p < 0.001$ )、PW 及び F/P 比が標準の区分での子宮内胎児死亡は非 SFD 児群で高く (0.9% vs 2.2%、 $p < 0.05$ )、PW が小さく、F/P 比が標準の区分での新生児死亡は SFD 児群で高かった (0.60% vs 0.08%、 $p < 0.05$ )。

SFD 児群の新生児死亡率が高かったことは新生児自身に何らかの原因がある可能性があり、PW が標準の区分で非 SFD 児群の子宮内胎児死亡が高かったことは胎児-胎盤循環の障害が想定された。

審査委員会では、PW と F/P 比による区分を適用して、SFD 児群と非 SFD 児群の周産期予後の違いを初めて明らかにしたことを高く評価した。以上により、本論文は博士 (医学) の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 尾島 俊之

副査 緒方 勤

副査 河崎 秀陽